

自由論題セッション C 報告要旨

【司会】平体由美（札幌学院大学）

【報告】

那須（白石）千鶴（淑徳大学）「19 世紀アメリカ合衆国の動物観構築再考—家庭動物愛護の奨励から野生動物絶滅擁護まで—」

後藤千織（一橋大学博士後期課程）「家族を統制する法体系の社会化と福祉活動—20 世紀初頭のカリフォルニア州サンディエゴ郡の事例を中心に—」

藤本茂生（帝塚山大学）「20 世紀初めにおける米国ボーイスカウト運動と大阪の『少年団』組織」

当セッションは、20 世紀への世紀転換期におけるミドルクラス像を、動物愛や愛情の向かう先、貧困層の規律化、国家の将来を担う少年の育成といった視点から、多角的に検証する貴重な機会となった。

第一報告の那須千鶴氏は、バッファロー保護活動を行なう 1870 年代のヒューマニストの思想と活動に焦点をあて、奴隷制廃止運動との人的・思想的つながり、キリスト教的愛の観念、そしてミドルクラス家庭における愛情育成の観点から、19 世紀後半の動物保護観を理解する視点を提供した。また、1874 年に上下両院を通過したにもかかわらず、グラント大統領の拒否権によって成立しなかったバッファロー保護法案が、76 年には下院さえも通過することができなかったことを紹介した上で、この時期に「野蛮」を征服し「文明化」を推進するネオラマルク主義と、野生動物の保護を「痛み」への共感から理解しようとするヒューマニストとの間の、自然保護と開発をめぐる論争が活発に行われていたことを示し、その意義について論じた。

第二報告の後藤千織氏は、20 世紀初頭に各地で成立した母親年金制度の運用に注目し、サンディエゴ郡区における郡福祉委員会と郡上級裁判所、および民間福祉団体である慈善活動連合の活動記録を基に、当該地域における貧困層、とりわけ家族遺棄のために夫による扶養義務不履行に直面した母子家庭の状況について詳論した。そして、当時のジェンダー観が福祉を施す側の選択基準に与えた影響や、福祉受給層の側のしたたかで柔軟な行動、貧困層をミドルクラスの視点から規律化するという意図、メキシコ系を中心とする移民家庭におけるアメリカ化の帰結などを説明し、国家による私的領域への介入がもたらした影響を多角的に検討した。

第三報告において藤本茂生氏は、20 世紀初頭に太平洋を越えたボーイスカウト運動が、大阪における都市生活のアメリカ化潮流の一つであることを明らかにし、共通性とその後の展開の相違について紹介した。当初は共に都市に生活する少年の自然志向の人格陶冶という点で共通していたが、アメリカにおいて

は「筋肉的キリスト教」に見られる男性性の育成や身体の強化、そしてチャリティの方向に発展していくのとは対照的に、日本においては植民地経営の使命感や夢を語る国家主義的な団体——植民地においては現地の人々に日本的社会教育を普及させる団体——として発展していくことを解説した。

(平体由美)